

---

ビヨンド・デセプション

第1巻

マジック・アクト創作のための  
理論とエクササイズ

著：トビアス・ベックウィズ

訳：滝沢敦

Triple Muse



Publications

 **scriptmaneuver**



## 目次

謝辞 3

前書 6

イントロダクション 17

## 第1章 あなたはクリエイター

23

信じなさい！ 23

日々、自分の世界を創造してゆく 23

ルールを仮定しろ 26

自分のマスター・マインド・チームを作る 27

現実のチーム 28

想像上のチーム 29

## 第2章 クリエイティビティのシステム

32

ゲンリツヒ・アルトシュラーのTRIZ理論 32

スリー・ステージ・システム 33

分析段階	33
操作段階	34
総合段階	35
エドワード・デ・ボーンのシステム	36

### 第3章 マジックを舞台で演じる際の基本的な原則 40

選択を行う	40
行われるべき選択	42
ストーリー	42
登場人物	43
小道具	44
舞台セット	45
テーマ	46
リズム	47
トーンとムード	48
スタイル	49
より大きな選択をする	50

## 第4章 探求の道具

53

創作ファイルをストックせよ 53

集めよ! 54

ストーリー 54

キャラクター 55

場面設定 56

ジョーク 57

音楽 58

整理する 59

思い出す 60

ノートをつける 61

## 第5章 考え方のエクササイズ

66

目的を見つける 66

行為 67

ドラマの構造 68

状況説明を盛り込む 70

興奮を作り出す「葛藤」 72

自分が何にパッションを感じているか見極める 75

パッションに関するエクササイズ 76

「なぜ？」攻撃 76

体を動かす 78

ジェフ・マクブライドの「パッション・ピース」エクササイズ 81

世界に及ぼす良い影響 104

外的要因 104

どんな反応を期待しているのか？ 105

内的要因 106

## 第6章 エクササイズ 〈体に考えさせる〉

108

マジシャンのためのシアター・ゲーム 108

キャラクターになること 110

ミラーリング 110

リバース・ミラー・エフェクト 113

センタリング 114

心の重心をずらす 115

アクセント 122

モチベーション	124
内的リズム	133
ムードとクオリティ	137
リアクション	138
マスクをつける	139
肉体的な実験	142
瞑想を観察する	143
ゆっくり演じる	144
はやく演じる	145
叫ぶ	146
ささやく	147
オペラ歌手のように歌う	148
セリフ無しで演じる	151
動かずに演じる	153
普段とは違うBGMを使う	154
反対のことを試す	157

小道具に人格を与える  
 サイズ感を変える  
 核を理解する  
 159  
 159  
 158

## 第8章 ケース・スタディ 163

- ケース・スタディ 1 お化けハンカチ 163
- ケース・スタディ 2 ショットグラス・サプライズ（ユージン・バーガー） 168
- ケース・スタディ 3 レインメイカー（ジェフ・マクブライド） 173
- ケース・スタディ 4 人体切断 177
- ケース・スタディ 5 クラシックに新しい息吹を（アンビシャス・カード） 183

## 最後に 189

## 参考文献 192

## 著者紹介 196

創<sup>創</sup>造<sup>造</sup>クリエイティビティ<sup>性</sup>が人間の能力の中で最も大切なものだといふことは、論を待たない。創造性なしでは進歩はなく、同じことを永遠に繰り返すだけだろう。

エドワード・デ・ボーン  
『水平思考』の著者



## イントロダクション

死ぬかと思うほど笑ったマジックを最後に観たのはいつでしたか？ マジックを観て涙を流した経験を、今でも覚えていますか？ それまでに見たどんなマジックとも似つかない、独特なマジックを最後に観たのはいつですか？ あなたの演技を観た観客が、これで人生が変わったと思うほど深く感動したのはいつですか？

あなたが独特なマジックを作りたいと、また自分のマジックで観客を感動させたいと思いつけているのなら、この本はあなたのためのものであります。

「自分なりの演じ方で演じましょう」とは、よく言われることです（ときにはマジック道具の解説書にも書いてあるくらいです）。これはつまり自分のクリエイティブ性を発揮して、単なる一トリックを、自分自身のパーソナリティに合った方法と見せ方で演じると言っているわけですが、具体的にどうすれば良いかは、誰も教えてくれません。8歳の私はこの文句を読んだときに、完全にうろたえてしまいました。自分のものにするだって？ このマジックを店頭で観たときは完全に引かかったし、早く家族や友人に見せて自分の素晴らしい力に驚いて欲しいというのに、一体どうやってこれをさらに発展させると言うんだ？

イントロダクション

大人になった私は、ブロードウェイの舞台に立つことを夢みて演技や音楽、ダンスを学ぶようになってきました。そこで受けたパフォーマンスとしての訓練では、自分自身の感情の幅を広げ、情熱を加速させ、演技者としてぶつかる様々な問題の解決法を探るための素晴らしいテクニクを学びました。ピッツバーグ大学では指導法を学びながら非常勤で演技を教え、その後ニューヨークで様々なショーのビジネス・マネージャーを務め、現在では世界で最も進んでいる革新的なマジシャンたちのマネジメントをしながら彼らの新しい作品を作る手助けをしています。

ここ数年は、ラスベガスにあるジェフが主催するスクールの「ジェフ・マクブライド&ユージン・バーガーのマスター・クラス」で教えることがあります。ここでは「マジックと舞台」というテーマで、舞台パフォーマンスとしての基本的な事柄を教えています。生徒の多くがこれらの事について考えたこともないという事実は驚きでした。

多くの人が「タネはどうなっているのか」という好奇心からマジックを始めます。際限のない騙しのテクニクに夢中になると、マジックを演じる際の最も大切な目的を簡単に忘れてしまふものです。それがつまり、観客を楽しませる、ということなのです。我々が最優先で演じなければいけない役柄は「エンターティナー」です。マジックは、そのための単なる手段にかすぎません。

このセミナーを繰り返し担当するうちに、講義内容は「舞台芸術を面白くしている要素」と、「すべての舞台芸術に共通する要素（つまり、映像とは違ってその場に俳優がいること、その場に観客がいること、何らかの「ステージ」があること、特定の構成で提示される物語、キャラクター、コスチューム、照明、その他すべての事柄）」の説明に重点が移っていききました。何年もの間、私が教えてきたことや、新しいマジックを監督する際に役立ててきたノウハウの大半が本書に記されています。

昨年からは、生徒が新しいアプローチでマジックに関する創造力を発揮できるようにするため、ワークショップの内容を演劇ゲームや即興演技（インプロビゼーション）のテクニクを教える方向にシフト・チェンジしました。私自身、俳優や監督として自分の能力を開発する際には、遠い昔に学校で学んだこれらの方法を引っ張り出して使っていたものです。それを、マジシャンとしての創造力を引き出すような内容に刷新し、組み替えました。このワークショップは新しい興奮を私と生徒にもたらししてくれました。我々は一緒に限界を引き延ばす喜びを学び、創造的に活動するための新しいアプローチを発見していったのです。ただ一つの不満は、セミナーに与えられた2〜3時間では時間が短すぎて、本当に学びたい深みへは到達できないことです。この種のエクササイズを十分に行おうとすれば、丸一日どころか何週間もかかります。なるべく早めにそうできるよう手配するつもりですが、それまではこの本で紹介する考え方やエクサ

サイズを、みなさんの時間の中で自由に試してみてください。

この本を読むときは、必ずノートをとるようにしてください。本書は実際に行うことを前提に書かれたものであり、読んで楽しむためのものではありません。ただ読んで考えを巡らせるだけでも面白く、役に立つと思われるかも知れません。しかし、この本の真価は、実際にエクササイズを行うことでしか発揮されません。読んだときには単純だと思っても、実際にやってみると非常に効果的だったというエクササイズもあるはずです。各エクササイズは、あなたの限界や持つて生まれた「遠慮する気持ち」の枠を押し広げるように、作られています。初めて試すときは、居心地が悪くなるものばかりかも知れません。でもそれなのです。成長するときには痛みが伴うものであり、それは必要なことです。そして、もしあなたがマジックを演じるアーティストとしてキャリアを積み上げていきたいのであれば、常に成長し続けなければならぬのです。新たなことができるように成長すること、自分の経験から新たな知恵を発見すること、そして素晴らしいアートを作り出すこと。人生においてこれよりも興奮することは滅多にありません。

あなたにはこれらのすべてを実現させる力があります…ただし、現在感じている限界を押し広げる気があれば、です。本書に書かれているのは、ギリギリの限界点で行うべきトレーニング

グのロード・マップです。限界を押し広げ、自分自身のクリエイティビティを掘り起こせるかどうかは、あなたにかかっています。冒険に旅立つ心の準備をしてください。そして一歩目を踏み出しましょう！

冒頭では数章を使って、クリエイティビティに関しての意識を広げる基本的な哲学や心理的な原則を紹介します。その後、すぐにでもあなたの創作プロセスに組み込める具体的なエクササイズを紹介していきます。最後にケース・スタディとして、本書で紹介する考え方とエクササイズが、実際にどのように使われて新しい作品が出来上がっていったかの実例を見ます。アクトが出来上がっていく過程をいくつか紹介しますが、中にはよくご存じのものもあるはずです。しかし、そうでないものも、あなたが自分自身の方向性を見だし、創造的なアクトを創り出す勇気を与えてくれるでしょう。

クション  
本書を読み進めるにつれ、一見バカバカしいエクササイズが出てくる知れませんが、確かに、どう見ても人をバカにしていると思えないようなものの中にはあります。しかしエクササイズを行っているときの居心地が悪ければ悪いほど、あなたは自分の限界を押し広げているのです。あなたの限界が広がるほど、将来の創作物や演技のすべてが面白くなっていくでしょう。

だから、どんどんエクササイズを行ってください。恐れや居心地の悪さに負けないでください。そして常に、楽しむことを忘れないように！

『崖の端まで来なさい』と声が言った。

彼らは答えた、怖いのです、と。

『端まで来なさい』と声は繰り返した。

彼らは崖まで進んだ。

声の主が彼らの背を押すと、彼らは飛んでいった。

ギヨーム・アポリネール  
（フランスの前衛詩人）